

I 夜間飛行 (サン=テグジュペリ 仏) 1931年

新潮文庫 堀口大学訳

操縦士ファビアンはチリ・サンチャゴからブエノス・アイレスに向かって、パタゴニア線の郵便機を操縦していた。中継点の一つ、サン・ジュリアン飛行場に、あと10分ほどで着陸すると連絡をした。時刻はちょうど昼から夜に移るころ。10分の小休止をしてまた出発した。夕暮れになると、計器類が読みにくくなる。それでも配電盤のスイッチを一つひとつ確かめる。パタゴニアから、チリから、パラグアイから、3つの郵便機がブエノスに向かって飛んでいる。ブエノスはそれらから受けた郵便物を今度は欧州に転送することになっているのだ。支配人のリウイエルはその振り分けに神経をとがらせ、一方で無電局からのニュースに耳をそばだてている。彼にとっては、平安の日も時間もない。それを待望もしない。老職工長ルルは、リウイエルに似て職務に厳格だった。彼は生涯色恋をしたことがないようだ。ペルランはリウイエルに呼びとめられた。それはちょっとした遅刻だったがそれを咎められた。リウイエルは一事が万事、少しの非も容赦しない人間だった。リウイエルは監督のピノーに「ペルランを懲罰しろ」と命令した。「理由はなんでもいい、適当に考えろ」だが、その一方で、「部下の者を愛したまえ。ただそれと彼らに知らさずに愛したまえ」同 p45 とも付け加えた。監督のピノーはいつも元気がなく、リウイエルの腰巾着で、意志の弱いところもあって、リウイエルはいつもこう厳然と言うのだった。

リウイエルは、パタゴニア機からの電報を読んでいたとき、「エンジンが不調だ」との連絡が入った。仕方がない、修理しなければならない。郵便機は1時間ほどしてなおり、それから飛び立った。操縦士の後ろには無電技師が坐り、独り気をもんでいた。地上で見える限り、天候は良夜でも、飛んでみるとそうでないこともある。無電技師は、下界の闇夜の中にわずかに点々と見える光だけで、自分の今飛んでいる有限な世界を認識する。彼はほとんど鉄の鋼材にしがみついているだけで、あとは前に坐っている操縦士ファビアンを信じるだけだった。

さて、飛行機が飛び立ってから、リウイエルは事務所に向かった。広場にはシネマのために集まってきた群衆がいた。彼はそんなものには関心がなく、彼らとすれ違いながら、流れと反対の方向に行く。狭い道の上の空に、電気広告があるのを見ながら思った。——僕はあの空の全体に対して責任があるのだ。『あの星はこの群衆の中に僕をたずねてきて、そして発見したのだ。あの星は群衆の肩を越して僕に信号を送っているのだ。』 同 p49, 50

【参考「星の王子さま」サン=テグジュペリ 内藤濯 訳】

「ぼくは、あの星のなかの一つに住むんだ。その一つの星のなかで笑うんだ。だから、きみが夜、空をながめたら、星がみんな笑っているように見えるだろう。すると、きみだけが笑い上戸の星を見るわけさ。」と告げて、王子はへビにかまれて姿を消した。ぼくは夜空を見上げるのだった。

彼は、あちこちの飛行機と連絡を取る重要な任務がある。リオ・デジャネイロから雑事の確認、モンテビデオからは気象のこと、メドサからは資器材調達のことなどだ。彼が事務所に入っていくといまだ一人事務員がいて仕事こなししていた。リウイエルはその男が頼もしく思えてならなかった。忙し

そうな彼に替わって、リウイエル自身が電話に出たが、どうやら天候が下り坂になっているようだった。リウイエルは最近脇腹に痛みをおぼえているが、そんなことより、301号エンジンを分解した際の結果報告をよみ込んでいた。彼の結論は、まず責任者のロブレに重罰を加えることだった。責任者はリシャル主任だった。さっそく彼を転勤にした、その後、荷役掛にした。あとで分かったことだが、灯火の点火が不具合になっていたのはロブレの責任だった。リウイエルは欧州便の操縦士に電話をして、出発前に自分のところにくるように言った。

さて、欧州便の操縦士は家で就寝中だった。その女房がなるべく寝かしておいてやりたいということでもそうしていた。そして刻限近くになって起きあがり、夫婦の会話をして、今日の段取りへと心の準備をするのだった。彼はこのブエノスアイレスからまずはブラジルを目ざすことになっている。風は南風でよし。彼は今日出発すれば次に家に戻るのは10日後くらいだろう。夫は彼女を抱きすくめて出ていった。リウイエルがその操縦士に言ったのは、単なる励ましではなく、前回のミスのリマインドさせるためだった。すなわち、前回は天気予報がすこぶるよかったのに、郵便機を途中から引き返したことへの叱責だった。天気予報がどうであれ、恐怖に満ちた飛行だったからやむを得ずして引き返してきたことを責めているのだ。操縦士は、エンジン音が濁っていたことも理由にあげたが、リウイエルは、それは嘘だと断定した。「あれはあとでも試験したが、異常はなかった。怖い時にはエンジン音が濁って聞こえるものなんだ」リウイエルは、「君は想像力が強すぎるんだ。さあ、よろしい、行ってきたまえ」操縦士は出て行った。リウイエルは一事が万事こうである。だが、こういう物言いは、リウイエルからすれば操縦士本人への配慮だった。「彼の話に同情したり、真顔で傾聴したりすれば、彼のうちに、冷静な判断とは異なる、神秘の世界を作り上げてしまう」と確信するのだった。リウイエルにとって、この郵便機の夜間飛行という事業は、まさに政府筋との戦いだった。従来そんなことは軍事飛行なみのとんでもないことだった。時速200キロの便への可能性は誰もが認めなかったのだ。だが多年奮闘の結果、リウイエルはついに勝利した。経験の積み重ねのうえで、リウイエルは夜間飛行に挑戦したのだった。多くの非難を受けながらも、彼はこの孤独の戦いを続けているのだ。

ところで、気がかりなのはパタゴニア機だった。アンデスを越えて東の内陸部に雷雲が広がってきた。明らかに暴風雨が近づいてきていた。



操縦士フビウスは、山の高さ700mのところ、雷雲の下、1700mの高度で飛ぶつもりだった。だが気象は激しくなってきた。各所の無電局からは着陸不適との連絡があった。風速は30m/sほどになっている。あと燃料は1時間40分くらいだった。

アスシオン機はフェノスアイルスに順調に向かっているので問題はなかった。リヴィエールはひとえにパコニア機からの連絡を待っていた。だが、そのころフビウスは真っ暗な闇の中、わずかな光を探していた。いまや彼にとって光はエンジン側のわずかな光しかなかった。これで闇の閉塞を打ち破らなくてはならない。フビウスの女房は、いつも夫を家から送ったあとは、それなりの時間がたつと、今頃はどのあたりを飛んでいることだろうと想像するのが常だった。でも今夜は自宅にいるのが不安だった。運命を共有したいとする気持ちから事務所に確認の電話を入れ、それでも不安はきえず、リヴィエールのもとにやって来た。リヴィエールは、ただ落ち着いて下さいと言うばかりだった。彼女は力のない拳を壁にたたきばかりだった。リヴィエールは機上の人を思うと胸が痛んだ。リヴィエールは愛するという義務よりもいっそう大きな義務があるように、漠然と感じられた。

フビアンは歯を食いしばって操縦していた。フェノスアイルスとは交信不能だ。機体は5トンほどするが、そんなものを突風が持ち上げる。高度計が500m、山に当たる危険がある。リヴィエールは覚悟を決めた。激突するかもしれないが、どこへでも着陸しよう。彼は自分の両手の中に、無電技師と自分の心臓を握っている感じがし恐ろしかった。フビアンはひきつけられるように上昇した。だが、そのあと機はいきなり異様な静けさの世界に入りこんだ。飛行機はいま、見慣れぬ空の一部、幸福な島影に抱かれた入り江の水のような、隠れた部分へ入っていった。彼は不思議な天体にきたように思えた。高い左右の雲から光が反射していた。彼は後ろを振り返った。無電技師も微笑んでいた。

地上の技師が無電を読み取り紙にかきおろした文面には、「暴風雨の上空3800mに閉じ込められた。海上に吹き流されれば、目下真西の内地に向け飛行中。下方は全部雲に閉ざさる。目下なお海上にありや否や知らず 燃料は30分」とあった。この電報はフェノスに転電された。

リヴィエールは瞑想していた。こんな時に監督のロビノーが来て、リヴィエールを孤独から拾いあげてくれた。彼は何とも今の状況を解決など出来るわけがなく、ただ事務所の中をうろうろしている。フビアンの妻がきたが、誰も言葉を発することなどできなかった。

リヴィエールが彼女に気づき、面会をした。ただ待つしかなかった。燃料が切れているだろうと思われる時刻になった。つなぎの予定の欧州便はともあれ、明日のことだ。予定通りに到着し、何も知らないアスシオン機の無電技師は、電報の最後にソナタ曲の一節を記していた。知らない者が、「天気はどうだ?」「いい天気だよ。フビアンが行くえ不明になったのか?」と会話してやっと事態を知った者もある。彼らは多くを語らなかつた。リヴィエールは、こんな時にあっても、いつも通りの予定通りの飛行であるべきだと胸中だが、今の彼は腕組みをし、黙想しているだけだった。彼がここでもし、欧州機の出発を中止したら、夜間飛行の存在理由は失われてしまう。だが、勝利だ、敗北だといっても意味はない。彼が今度喫した敗北は最も勝利に近い敗北だった。大切なのは、ただ一つ、進展しつつある事態だけだ。彼は、事務員の間をとおって、仕事が待っている支配人室へ戻った。それだけだった。

《第1幕》

岩波文庫 湯浅芳子 訳

プロゾロフ家には三姉妹がいる。将軍だった彼等の父親は11年前にこの地に旅団長として赴任してきたが、1年前に亡くなった。長女オーリガ28歳で独身。女学校の教師をしているしっかり者だが、別段変化を求めていない。次女マーシャは中学教師クルイギンと結婚をしているが、その夫は退屈な生活に後悔している。彼女は、モスクワ時代にもどりたいとの思いをよく口に出す。そしてその閉塞感のはけ口をもとめ砲兵隊中佐のヴェルシーニンと不倫をしている。三女イリーナは電信局勤務。長女と次女の間にはアンドレイという息子がいて、ナターシャという許婚者がいる。この家には軍関係の下宿人がいて、いつもに賑やかではある。事実上ナターシャが切り盛りしている。

《第2、3幕》

3姉妹にとってはこの家の雰囲気は殺伐としたものだ。男どもの行状(賭け事、部屋代の滞納、落ち着きのない所作——)をみていると入モスクワに帰りたい気になる。軽佻浮薄なトーゼンバッハ中尉は三女イリーナに思い入れがあり、それで気を引こうとしていたが、マーシャは時々皮肉で切り返してやる。騒がしさが終わり、イリーナがひとりになったとき、ソリョーヌイがイリーナに近づいてきて、「愛している」とささやいた。ただこのイリーナもこのソリョーヌイが嫌いだった

アンドレイは今はこの町の議会の議員になっていたが、防災対応の点で頓馬なところがあり、覇気にかけていて、マーシャは愛想をつかしていた。

《第4幕》

この町に駐屯する砲兵隊は、きょう移動することになり、将校たちはそれぞれ別れの挨拶をしている。フェドーチクとローデ両少尉もやってきて、別れの挨拶をしていった。ところで昨日、ソリョーヌイは、この期になってイリーナに結婚を申し込んだ。これを知ったトーゼンバッハも、これに負けじとイリーナに結婚を申し込んだ。イリーナはどちらかというトーゼンバッハと結婚したかったが、一方で、自分は教師の試験に合格し、明日から女学校に勤務することになっていた。結婚相手、職業選択、二つのことで決断をしなければならぬ状況である。

さてこの家にいる30年も住み込みをしている婆やのアンフィーナはオーリガの世話で、女学校の寄宿舎に移ることになった。マーシャの口から詩のような言葉が出た。——「もう渡り鳥が飛んでいる——白鳥か、それとも雁か、可愛い鳥どもよ——」——自分もどこかへ飛んでいきた気持ちからだった。そこへヴェルシーニンがやってきたし、運悪く夫のクルイギンもやってきた。がクルイギンはいやみを言うだけだった。ただそのほかに、皆に急ぎ報せようとしたことがあった。それは、イリーナをめぐる、トーゼンバッハとソリョーヌイが決闘することになったのだ。その刻限はまもなくだった。イリーナもマーシャも不安になった。軍医のチェプトウイギンは新聞を読みながら、「そんなこと、どうでもいい」とうちやった言い振りをした。河の向こうで銃声がきこえた。しばらくしてオーリガが駆け込んできて、「きょうはとて恐ろしい日よ。たつたいま男爵(トーゼンバッハ)が決闘で倒れました」と知らせてきた。砲兵隊は去っていった。虚脱のイリーナは懸命に自分を維持しようとしていた。そして「明日、わたしはひとりで出かけて行って、学校で教えるの。そして自分の一生を、もしそれが必要かもしれない人たちにあげるの。今は秋です。まもなく冬がきて、雪がふるでしょう。でもわたしは働くのよ、働くのよ——」 同 p111,112 とただ口にするだけだった。

Ⅲ ヘルマンとドロテア (ゲーテ 独) 1797年

岩波文庫 佐藤通次 訳

ライン川に程近いある町を、ナポレオン戦争の下で難民となった人々が続々と通過していく。沿道の家の老夫婦とその息子ヘルマンは、彼らへの同情から衣服や食料を提供してやっていたが、その折見かけた難民の娘ドロテアに心ひかれた。彼女の他の老若男女の難民たちに尽くす姿に彼は彼女にいつそう心ひかれた。彼らをそのまま見送ってしまうことは二度と会う機会がないことを思うにつけ、彼は彼女と結婚したかった。それを両親に話すと、母親は実は自分も20年前に難民経験をしたことがあり、その辛さを思い出しては、ここは彼女を追うべしと支持してくれたが、父親は当初反対したものの後悔し彼を励ました。それだけでなく、通り過ぎていく難民の中から彼女を再び見つけ出す必要があるので、牧師と薬局の主人に協力を頼んでくれた。※

※薬局の主人は「合点だ！ “善は急げ(Eile mit Weile)”だと、わざわざアウグストゥス皇帝の箴言(Festina lente!：歴史家ストロウスの伝)同 p84を引用して早速動いてくれた。

ほどなく彼女は見つかった。彼女はこの難民団の長老のところで周囲の面倒を見ていた。彼女は襲の多い藍色のスカートをはき、髪の毛の豊かな人で、美しい容姿で愛嬌のある人だった。長老が牧師と薬局の主人の意図を知ったうえで、「彼女にはかつて婚約者がいた。彼女はいま指に婚約指輪をはめているが、その婚約者はフランス革命時にパリにいて、あるトラブルに巻き込まれ命を落としてしまったのだそうだ。彼女のひとりは結婚相手としてすばらしいよ」と教えてくれた。一方、ヘルマンがキャンプ地近くの泉で、牧師と薬局の主人の帰りを待っていると、そこに、偶然彼女が水汲みにやってきた。彼の姿に気付いた娘は明るく会釈した。彼は心をおちつけて娘に話し出した。——「あなたのことを両親に語ったら、両親がえらく褒めていました。あなたに私の村に来て欲しい」——すると娘は、それを使用人として採用したいの意と受け取って、いとも簡単に、いいですよ、と答えた。「ちょうど、産婦の方やその他の少女の世話をする他の人が見つかったものですから」とほほ笑んだ。

そこで彼女は、ヘルマンといっしょに長老のところに戻り、「わたしはこちらの方のお家に使用人としていくことになりました。難民団の人たちは皆、その決断を、寂しくおもいながらも祝福してくれた。子どもらも周囲の大人たちになだめられて、やっと彼女の服から手を放した。ヘルマンとドロテアは名残惜しそうにこの地をあとにした。陽は大分傾いていた。

二人がヘルマンの村にまで帰ってきたとき、もう月が出ていた。彼は独り喜びを抑えていた。娘はしばらく無言でいたが、ようやく口を開いた、「なんという気持ちのいい、美しい月夜ですこと、昼間のような明るさですわ。——」山道の途中、娘が馴れぬ道の石につまづいたとき、咄嗟にヘルマンは彼女の体を支えた。家について彼が娘を皆に紹介した。父親は気を利かせたつもりで、「美しい女房だ」と言ったが、娘ドロテアは心を高ぶらせ、熱い涙を流した、「何という冷たいお言葉。わたしは帰らせていただきます」と。父親はふてくされてしまったが、母親は何とかドロテアを慰めた。見るに見かねたヘルマンは、「泉のところに行ったのは、おまえを使用人に雇うためでなく、おまえの愛を求めためだった」と。すると彼女は彼の顔見つめ、彼の歓喜に満ちた抱擁と接吻

を受けた。それがひとしきりついたところで牧師はその場にて結婚式を執り行った。

さて彼女の指の指輪のことで彼女は過去の経緯を話した。それは長老が語ったとおりだったが、彼女はさらに婚約者の最後の言葉を語った。それは『**どうぞわたしのおもかげを胸に秘め、劣らぬ勇気で仕合せにも不仕合せにも当たる覚悟をしておくれ。もし新しい住まい、新しい縁の心がひかれたら、そのときは運命の与えるものをありがたく受けるがよい。愛してくれる人を清く愛し、その良い人に感謝して頼るがよい。——生きる日を大切と思っしてほしい**』同 p173,174 だったそうだ。彼女は今一度その言葉を蘇らせた。ヘルマンは感動し、「**おまへはわたしのものだ。心を痛めてそれを守り、心を労して受用するのをやめて、勇氣と力で当らうとおもふ**」同 p175,176 と誓った。

Ⅳアントニーとクレオパトラ (シェイクスピア 英) 1606 or 07年

岩波文庫 本多顕彰 訳

BC44年のシーザー暗殺後、オクタヴィアヌス、アントニー、レピドゥスの3執政官による第2次三頭政治がしかれていた。かつての名将アントニーは、今はエジプトのアレキサンドリアに駐在し、その地でクレオパトラの色香にはまって遊興生活を送っている。

(クレオパトラ)**それが愛情だったら、どれくらい大きいか、お話して。**

If it be love indeed, tell me how much

(アントニー) **勘定が出来るような愛情なら、貧しいものさ。** 同 p9 (1幕1場)

There's beggary in the love that can be reckon'd

一方、ローマではあとの二人が執政官の仕事をしている。そんな中で、三頭政治に反逆する小ポンペイウス(彼の父、大ポンペイウスはBC48年にカエサルとファルサロスで戦い敗死した)が叛旗をひるがえし、海軍力をつけはじめている。

アレキサンドリアのアントニーのもとへ、彼の妻ファルヴィアや弟ルシウスが(小ポンペイウスにくみして)戦死したことや、また、パルティア軍がアジアで反乱を起しつつあることが知らされてきた。アントニーはやむなくクレオパトラに別れを告げてローマに帰ることにした。

ローマの戦雲はひとたび回避された。アントニーはアテネに赴任するが、オクタヴィアヌスが不穏な動きをとるようになってから再び、アントニーとオクタヴィアヌスの間に緊張が高まる。そこでこの二人の関係を修復するために、アントニーはオクタヴィアヌスの姉オクタビアと結婚した。オクタヴィアヌスは、アレキサンドリアに単身で再赴任したアントニーが、クレオパトラと既に皇帝のように振る舞っていることを理由に、彼は軍を率いてアレキサンドリアに向かう。オクタビアは夫と弟ルシウスの板挟みとなって悩む。一方、クレオパトラがアントニーの結婚に激怒した。

やがて両軍は激突する。クレオパトラの軍船が逃げ出したのでアントニーの乗る船がこれを追いかけたのが切っ掛けで、置き去りにされた味方の船は次々に敵方へ寝返ってしまった。アントニーがアレキサンドリアの宮殿に戻ると、クレオパトラはオクタヴィアヌスの使者におもねる態

度だった。アントニーは口汚くののしり、いよいよ死を覚悟して、召使いたちのこれまでの労をねぎらう。

いよいよ決戦の日、アントニーは、忠実な腹心のイノバーバスが敵方に寝返ったことを兵から知らされ自分の不運を嘆くが、彼自身は勇敢に闘い、敵方をアレキサンドリアから撃退する。しかし、翌日、アントニーは劣勢の中、クレオパトラへの憤りと不信感から彼女をののしった※。

※「**三度 * 男をかえた女郎め、おれをあの小僧に売り渡したのはおまえだ**」

同 p148 (4幕12場)

* プトレマイオス、カエサル、ポンペイウス

彼女は耐えられなくなり、宮殿の廟にこもり、侍女チャーミアンの意見にしたがって、女王が自殺したとアントニーに伝えさせることにする。嘘の知らせを信じたアントニーは剣を刺して自殺を図った。兵士が狼狽する中、瀕死のアントニーは自分をクレオパトラの許に運ぶよう命令する。そして、アントニーはクレオパトラと廟の屋上で口づけを交わして絶命する。

アントニーの悲報に接したオクタヴィアスは、最初、彼女を凱旋パレードの飾り物としてローマに連れて帰るつもりだったが、それを知ったクレオパトラは正装して自らの胸をナイルの毒蛇にかませて自殺した。やってきたオクタヴィアスはアントニーの傍らにクレオパトラを葬るよう指示をして終幕。

[史実と異なる点]

- ・ 武将アントニーは史実では妻オクタヴィアを愛しており、3人の子供もいるが、本作では、クレオパトラを真剣に愛する一男性となっている。また彼女は自分に近寄る男性に外交戦略の一環として対処しているが、本作では彼同様、愛を貫く一女性であり、死に臨む姿も厳粛に描かれている。
- ・ クレオパトラには、カエサルとの間に一子カエサリオンがいるが、本作では登場しない。

V 欲望という名の電車 (T・ウィリアムズ 米) 1947年

新潮文庫 小田島雄志 訳

ルイジアナ州ニューオーリンズの貧民地区。ここにいる妹ステラ/スタンリー夫婦を頼って姉ブランチがミシシッピ州ベルリーブからやってきた。「**「欲望」という名の電車に乗って「墓場」という電車に乗り換えて、6つ目の角で降りればいい**」 同 p12 との道案内で無事についた。ステラの夫(ポーランド系)は、彼女を今も南部ミシシッピ州ベルリーブの大地主と誤解するが、実は借金で土地・屋敷を失っていたのだ。彼女はその借金は自分の責任ではない、それは全部先祖が先食したのだと確信している。彼女は27歳の誕生日をこの家で祝ってもらった。楽し気な彼女の鼻歌は「ペーパー・ムーン」の一節だった。

たとえペーパー・ムーンでも / 海は厚紙細工でも/
嘘もまことになるものよ / ただ私を信じたら!

彼女は不都合な現実、思い込みで、変えることができると信じているのかもしれない。彼女にはもう一つ悪材料がある——自分の恋人が同性愛者だと分かった事件以後、今度は自分も英語教師の身にありながら教え子に手を出した。それで教師をクビになった。——彼女は実は身も心もずたずたなのである。

スタンリーは、ステラの事情の背景を知りたくて、細かいことを尋ねた。「屋敷を失ったってどういうこと? 売り渡したの? その譲渡契約は? ——」そんな質問に応える義務はないと姉は受け流す。それでも知りたいスタンリーは、彼女がバスルームに入っている間に、彼女のトランクを開けたみた。派手派手しいドレスや高価な宝石類(実は模造品)が出てきた。夫は、これが高校教師の給料で買える代物か、と喚いた。ステラは「姉さんを侮辱するのはやめて!」と興奮した。姉のランチがバスルームから出てきて、そのトランクを見て、むしろ泰然と構えた。ランチは仕切りカーテンの向こうで外出用の新しいドレスを着た。ローブを脱いで、「タバコいいかしら?」、「背中のボタンをとめて」、「まあ私のトランク爆発したみたい」とスタンリーをおちよくった。だが彼女自身、過去の残影と虚飾のなかで自分を慰めているに過ぎない。スタンリーは彼女を見下した。彼女を支える「物」は昔のラブレターだけ。スタンリーへの見栄で、石油王となっている旧友に電報を打つが、結局自分で妄想を作り上げているだけだ。彼女の哀れな生活を妹ステラも悲しく見る。姉妹で楽しく過ごせたのはフレンチクォーターのナイトクラブに出かけたことくらいだった。ランチは、この家にやってくるポーカーの好きなミッチという、スタンリーよりは少しだけ健気な感じのする青年を相手に、しみりした話をする機会があった。それは、自分の16歳のときの初恋の話だった。だがそれは甘い切ないものではなく、相手の求める救いに応えられなかったという深い悔恨を残すものだった。というのは、相手の少年は突然カジノから飛び出して、口に銃をあて自殺したのだが、その出来事は、少年が自身同性愛者だと告げた直後のことだったそう。——だが、いきなりこんな深刻な話を聞かされたミッチはぎこちなく立ち上がった、どうしていいかわからなくなった。ただランチはミッチの胸に自分をあずけた。だが、ミッチとはこれだけに終わった。

きょうもまた、スタンリーは リノリウム製の布のかかった台所のテーブルの下でスティーブ、ミッチ、パブロとポーカーに興じていた。テーブルにはウイスキーとグラスがおかれている。そこへステラとランチが入ってきた。彼女ら二人の会話に「やかましい」とどなるくらいにポーカーに執心していた。あとはどこからか聴こえてくるブルース「ブルーピアノ」の音が哀愁をかきたてる。「やれやれ、今やステラに赤ん坊が生まれるって時に、——」とスタンリーは、ツキのなさに白けた表情で、愚痴をテーブルの上でこぼしていた。それを聞いたランチは、「ステラに子供が? なんてすばらしいのよ」と叫んだ。ステラが妊娠していることを知った最近のスタンリーは、以前に比べればましな亭主になりつつあるが、それでも自宅でポーカーでもやるときには目が血走ってしまう。そんなときランチ、ステラの姉妹は何をいっても無駄だ。スタンリーにはポーランドポルカしか聞こえないのだ。だいたいこんな環境自身、ランチには落ち着きようがない。4人のポーカーの男たちの自分本位な騒々しさに、ランチは怒った。「帰ってよ、——礼儀ってものがあるなら!」と言った。すると今度は、スタンリーがステラに背後から襲いかかるようにした。他の男たちもさすがにそれを制止した。がそれでも喚き声やつかみあい罵る声。スタンリーはついに、二人の男に抑えられた。ステラは「出ていくわ」と叫んだ。ランチは慌ててステラを抱えるようにして二階の家主の部屋

に連れていった。大分たってから興奮が収まったスタンリーを置いて、他の男たちは帰った。スタンリーは電話で二階の家主に、「女房を出せ」とわめく始末。そして今度は表の舗道にでてステラの名を叫んだ。大分して、ステラが二階から降りてきた。彼は彼女の前に膝まずいて泣くばかり。ランチもゆっくり戻った。ここでは事件が多すぎた。最後はステラが手配した精神病院に入院した。

ランチの過去の残影にすがって生きる姿は哀れでさえある。スタンリーは移民のたたき上げ、庶民ではあるがこれからのアメリカを特徴づけてやろうとする図太さを感じられる。さて本当にニューオーリンズに「欲望」という名の電車がかったのは米国一流の洒落であろうが、考えようによっては、欲望なんて電車に乗ったり下りたりするたびに起こり消える、矮小なものだと割り切れたら立派なものだ。

VI チャック・モール (カルロス・フェンテス メキシコ) 1954年

岩波文庫「アウラ・純な魂 ほか4篇」より 木村榮一 訳

友人フィリベルトがアカプルコで夜間水泳をしていて溺死したとの知らせに、俺は身元引受のために出かけて行った。書類の中に日記があったので、故人には悪いがそれを読んだ。それにはこうあった――

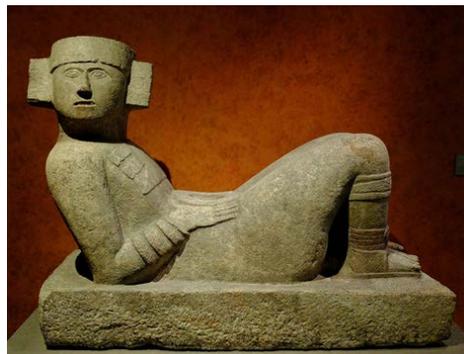
俺は、急にキリスト教以前のメキシコの土俗信仰のことを考えていた。そしてラギニーニャの店でチェック・モール※の石像が売りに出ているのでこれを買った。メキシコ人は、キリスト教国が入ってきて、**メキシコの文明は、スペイン人によって滅ぼされた。現在残っているのは、死に絶えた過去の遺物でしかないであろうが、それらは今はただ眠っているだけだ、時代を経れば、それは再びよみがえってくるだろう。**俺はそう思う。

(作者カルロス・フェンテスの考えでもある)

※チェック・モールはチチェンイツァ遺跡から出土した雨の神で、その信仰儀式には、何人もの生きた心臓が生贄にされた。

俺はそれをひとまず地下室においていたが、知らずに台所の水を出しっ放しにしていたため、水浸しになり、それが地下室に入って行って、チェック・モールは水浸しになった。これがきっかけで水にまつわるトラブルが次のように連続した。――

- ・水道工事屋が来ない
- ・机の瓶の水が赤く染まったり、葉巻の煙が空中を漂ったり、像がゆがんだり
- ・部屋に人の気配や血のにおい、



といったおかしなことが起きた。一方、チャック・モールの石像も変化してきた。

『チャック・モールは今ひとつこくなっている。彼はあらゆる植物の神話的な父親だ。彼は、耳障りな笑い声とたまらない悪臭をばらまいている。彼は、我が文明にやってきたフランス人考古学者たちのことを語る。彼らは彼らで自分たちの感覚で我々のことを語りたがるが、**チャック・モールの魂は、石の彫像とはべつに水がめや嵐の中で生き続けてきた。もとの隠れ家から残酷でしかも不自然な形で引っ張りだされたが、彼はそのことを決して許さないだろう。**』 同 p21

古代の芸術作品が今や危機にさらされている。俺はチャック・モールに、トラロック(アステカの雨の神)との関係について訊いたが、彼は機嫌の悪そうな顔をしていた。

乾季になった。彼は機嫌がわる、二階の部屋の家具類を壊していた。彼は言う、水が欲しんだ、と。そこで俺が起こって、「お前をラギニーニャの店に売り戻すぞ」というとおとなしくなった。そこで俺が起こって、「お前をラギニーニャの店に売り戻すぞ」というとおとなしくなった。

チャック・モールが夜な夜な出ていくので、そんなときに彼の部屋をのぞくと、香料と血のにおいがする。また床には、犬や猫やネズミの骨がころがっており、これはきつとこれらを食べているのだと思った。彼は自分で食べる以外に、生意気にもレストランに電話をして料理を取り寄せる。そしてそれを俺に払わせる。また俺の家から2ブロック離れたところにある公共泉水まで俺にいかせて水を汲んでこいと命令する。彼の横暴さに対抗しているうちに、市から電気の供給を止められてしまった。あるとき、彼と廊下の上り降りですれ違ったが、そのとき肌と肌が触った、彼の鱗におおわれたにはさすがに、恐ろしくなってきた。

ところで俺は職場の役所で、金銭出納の手続きを間違えてお目玉を食った、水資源局の上役に「チェック・モールに頼んで雨を降らしてもらいましょうか？」と提案したら、「頭がおかしいんじゃないか」と言われ、ついに首になった。そんなことにお構いなく彼はだんだんと俺にひとつこくなってきた。だが彼は水気なしでは生きていけない。乾季になれば彼も石に戻るはずだ。そうなる俺もおしまいだと思うようになった。

俺は考えた、――今夜、彼は出ていこう。そのとき俺も逃げよう。アカプルコに行って羽を伸ばそう。そして彼の死ぬのを待とう。この家は彼にくれてやればよい。――

フィリベルトの日記はここで終わっていた。

私は葬儀を出してやるためにメキシコに行かねばならない。そのバスの中で考えた。フィリベルトは仕事のしすぎだったのか、精神的な病いだったのか。とりあえず気の毒なフィリベルトの棺を軽トラックで家まで運んでもらった。鍵穴に鍵を入れてまわすと、ドアが開いた。すると俺の前に、ガウンを羽織った黄色いインディオが立った。俺が名乗ると、そのインディオは気さくに、「いや、気になさることはありません。遺体を地下室へ運びます」と言った。